企　画　情　報　部

高林 克日己

135周年記念誌に寄稿するにあたり，企画情報部の誕生は現在で35周年，すなわち昭和50年頃であるからほぼ現在の新病院と同時に誕生した。言い換えれば千葉大学医学部の創立100周年で出来上がったともいえる，比較的新しい部門である。現在はすべての国立大学医学部には医療情報部が存在するが，全国に先駆けて作られた医療情報部である。当時起こり始めたIT化の中で，はじめは講師として呼吸器外科から配属された里村洋一講師が初代部長となり，病院情報システムを部門ごとに作っては束ね，全体を構成していった。当時はレセプトの電算化が中心であったが，1980年代からは検査システムの構築とデータの蓄積が始まった。また当院の特徴としてマサチューセッツ総合病院（MGH）で始まったMUMPSシステムを採用したことが挙げられる。現在でも1980年代からのデータを一貫管理できているが，これは当院が世界に誇るべき世界最長の病院情 報資産になっている。また既にこの時代にCUPIDSと呼ばれる本多正幸講師（現長崎大学医学部医療情報　部教授，副学長）がMUMPSで作製したDWH（データウエアハウス）を一般ユーザーに提供している。その後ほぼ５年ごとのシステムリプレースのたびに拡充が進められ，1990年からはオーダエントリーシステムが開始された。この結果として処方歴などが追加され，処方と検査結果を表示する経過図を自動合成できるようになった。さらに画像の電子保存も進み，2000年にはＰＡＣＳの導入が開始された。またこのころから電子カルテに対する研究が進み，試行を繰り返したうえで2003年には全国の国立大学病院の中でトップを切って電子カルテの運用を開始した。高林は1985年ころからエキスパートシステムの開発として当時の第二内科と兼務し，こののち第二内科から山崎俊司，鈴木隆弘（現講師，副部長）が加わることとなる。神経内科からは津本周作が加わった。彼はデータマイニングなどに造詣が深く，1999年若くして島根大学医学部医療情報部教授となった。さらに第一内科からも横井英人が参画するが，請われて母校香川大学に戻り現在香川大学医学部医療情報部教授となっている。このように当医療情報部・企画情報部は全国に先駆けてスタートし，電子カルテをはじめとした各種システムの導入の魁となるだけでなく，さらなるIT化を進めるとともに現在４名の国立大学の医療情報部教授を輩出している。2004年にはマネージメント部門も担当するようにとの文科省からの要請もあり，千葉大学では企画情報部と改名し，病院の経営にも情報を介して主体的に協力することとなり，高林が教授となった。ちょうどこの頃に診療科再編，独立行政法人

企画情報部スタッフ集合写真

化，DPC制度の導入，病院機能評価受審など病院のガバナンスを問われる多くの出来事が集中し，これらに積極的に関与し，特に病院経営のための収支計画，将来の再開発計画，中期計画作成などに関わってきている。経営に民活力を入れるべく千葉銀行からの出向を依頼し，准教授として鈴木孝人，そして現在櫛引永氏が活躍している。また医療情報のみならず，診療情報全体の管理としての診療情報管理士の登用，DPCに伴う診療報酬のチェックのための医事職員の登用を行ってきた。そして兵庫医大から藤田伸輔を地域医療連携部の准教授として迎え，共通事項の多い中，院内の患者相談にあたるだけでなく，システムの開発を一緒に進めている。診療情報管理として，診療情報管理士４名（進藤，貝塚，後藤，羽石）がカルテのオーディットをはじめとした業務にあたっている。また事務組織の経営企画課とは表裏一体の関係でつながっていて，そのシステム運用係とは病院情報システムの運営で協力関係にある。また医事課，管理課とも医療費，物流などさまざまなことで連携しており，医療職が属するもっとも事務方に近い部署といえる。今後も病院の中枢として情報の収集とともに，解析と開示を進め，千葉大学病院の発展に寄与するとともに，県全体，さらには国家の医療も考えるシンクタンクとしての役割も担っていくと自負している。2012年からはリプレースしシステムは５代目のsystem Chiba Vとなり，機械室とともに新外来棟に移転する予定である。このように企画情報部自体がごく近い将来，①病院情報システムと診療録を含む医療情報全体の管理運用，②情報の分析と経営管理，③地域医療の分析・地域医療連携・将来計画という多部門に分かれていき，これらを統合した経営政策部門として発展していくと考えられる。

（たかばやし　かつひこ）